

## 第 9 回 アジアシンポジウム (IAEG アジア地域会議) 報告

第 9 回アジアシンポジウム (IAEG アジア地域会議) が 2013 年 9 月 24-25 日に第 7 回の中国成都に続いて北京で開催された。

### 1. シンポジウム

#### 1.1 会議会場

会場は北京国際会議場 (BICC) で、北京オリンピックの鳥の巣と称された陸上競技場のすぐ近くにあり、五洲大酒店 (Continental Grand Hotel) と連結しており、中国人以外は大部分がこのホテルに宿泊していた。

受付、発表会場の補助等は、全てユニホームを着た男女の若者が行っていた。

展示ブースは 10 区画あって、そのうちのひとつに日本の企業の現地法人が参加しており、計測技術のアピールがされていた。2015 年の京都会議においても、このような技術展示が必要と思われた。

会議の直前にアジア各国グループにポスター作成の要望があり、日本からも急ぎで準備し印刷して持参した。中国、日本、インド、韓国、シンガポールのポスターが展示されたが、奥まったところに掲示されたこともあり注目されていなかった。

#### 1.2 会議

会議は 8 時 30 分からオープニングセレモニーが始まり、IAEG アジア地域副会長の Runqui Huang 氏の司会で、開会された。

Sijing Wang 元会長の挨拶に続き、Faquan Wu 事務局長 Carlos Delgado 会長らから祝辞があった。今回の会議のテーマは、Global View of Engineering Geology and the Environment と国際化を強調したものであり、それぞれのセッションに分かれて基調講演およびプレゼンがあった。参加者は 220 人とのことであった。また、305 のアブストラクトと 165 の報文に対して、

78 人が査読を行ったことが報告された。



会議風景

ふたつの会場に分かれて、基調講演が 40、プレゼンが 46 と相当多かった。基調講演以外のプレゼンは中国が 33 と圧倒的に多かったがロシアから 7 と中国以外では突出していた。

1 日目のセッション 1-2、Mechanism & Risk Reduction of Geo-hazards において千木良会長の基調講演があったほか、土木研究所の佐々木氏のプレゼンがなされた。



千木良会長の基調講演

プロシーディングは、厚い紙質に印刷されたプログラムのほか、論文集は、900 ページ、厚さ 5.5cm に及ぶずいぶん立派な厚い装丁のもので、そのほかにアブストラクト集もあった。

また、ポスターセッションはノミネートされたものが 46 あった。

1 日目の夕刻には、歓迎会がホテルの会場であった。円卓を並べた中国料理で、相変わらず中国の派手な演出であった。

#### 1.3 感想

今回の会議参加費は 550~750 ドルと相当に高かったが、会議場の立地・規模、プロシード

イング、派手な歓迎会を見ると無理もないと思えるものであった。会議テーマの見方によっては、中国が国際社会で認められたことをアピールしたものであるが、富裕層のみを対象とした会議でもあった。

23日にはアジアの主要メンバーで昼食会が開催された。中国、韓国、香港、ベトナム、シンガポール、インド、イランが参加し、日本から千木良会長、大塚副会長、茶石が参加した。

## 2. IAEG 総会 (Council meeting)

総会は前日の 9 月 23 日に行われた。

### 2.1 出席者

参加者は IAEG 会長、事務局長、7 名の副会長、元会長 3 名、編集局長および Web 管理者のほか、各国から約 30 名、アジアは 8 か国から出席があり、日本から千木良会長、大塚副会長、茶石が出席した。



総会の会場風景

### 2.2 活動報告

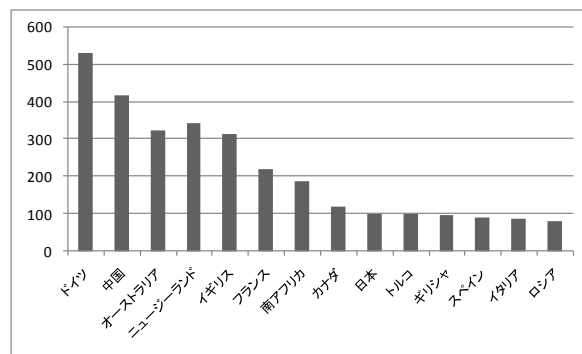
会長および事務局長から、IAEG の主な取組と課題について紹介があった。2014 年の 50 周年記念大会、会誌の編集と Springer との関係、3 学 Federation と JTC に関する行動などについて説明された。

#### ① 会員状況

57 カ国のうち 31 から状況報告があり、その合計は 3,515 名(会誌あり 2,020、会誌なし 1,477、賛助 31)で、ヨーロッパの人数が最も多く、次

いでオーストララシアとアジアとなっている。

会費については、期間内に納めたのは 20 カ国のみとのことであった。



主要国の会員状況

会員数と活動はヨーロッパ、アジア、オーストララシアに集中しているが、2018 年の大会の開催をアメリカが望んでおり、関係を密にする良い機会であることが報告された。

#### ② 副会長報告

オーストララシア、アジア、南ヨーロッパ、南アメリカ地域各国の活動報告について各々副会長から報告があった。アジアは Runqui Huang 副会長から報告され、第 10 回アジア地域会議(アジアシンポジウム)が日本の京都で開催される予定であることが述べられた。

#### ③ 会誌ほか報告

会誌と E-token の配布は問題がなく、スプリンガーとも良好な状況にある。編集局長は長年勤めた Brian Hawkins 氏から Martin Culshaw 氏に代わった。

年間の論文提出は 275 程度で、そのうち 55% から 70% は査読の前に提出者に戻している。理由は、地質的内容が乏しかったり、英文が貧弱などである。年間では 80 から 100 位の論文数となっている。

また、会誌の電子化について議論がなされたが、会費収入(現在の先進国の会費は、会誌あり 37€、会誌なし 12€)にも影響するなど慎重な対応が必要との意見が出された。

#### ④ その他報告

2012 年に、最も大きな応用地質の関心分野と、

IAEG の発展への提言のインターネットによる調査を行った。13 カ国から 134 の返答があり、事務局長から報告された。このような調査は、今後も毎年実施する方針である。

IAEG 国際研究計画と研究成果の賞判定の仕組みについて検討し、案の提案があった。

Web マスターであるイタリアの会長の Giorgio Lollino 氏からサイトの状況について簡単な報告があった。

### 2.3. 会計報告

収入は 128K€、支出は 81K€で 47K€の黒字であった。前会長から、2012 年分未払い国以外にそれ以前の会費未納国について催促すべきとの意見があり、参加していた当事国から反応があった。その他の国については、3 か月以内の支払いを会長と副会長で催促することとした。

### 2.4 委員会報告

TOC(Technical Overseeing Commission)メンバーである前会長の Fred Baynes 氏らから、委員会の活動状況の報告があり、不活発なものについては中止あるいはメンバー交代の提言があった。

4 年前に日本も加わって初会合があった C-24(Active Tectonics)については、四川地震 5 周年シンポジウム、地震地質学と四川地域の災害の出版等が報告された。

## 12. IAEG 関係会議

### ① 2014 年の IAEG 大会

1,760 ものアブストラクト提出があったことが報告された。予定している 50 周年記念誌については、資料や写真が各国から集まっており、220 ページ+写真になりそうで、本の構成、体裁などほぼ決定した。日本からは第 1 回アジアシンポジウムの資料を提出済である。

### ② 2015 年アジアシンポジウム

第 10 回の記念シンポジウムを京都で開催する計画が千木良会長からプレゼンされた。開催

予定日は、9 月 26-28 日、場所は京都大学。



千木良会長による日本開催のプレゼン

### ③ ブルガリア会議

2015 年 9 月に予定している会議を IAEG 会議としたい旨の意思表示がブルガリアからなされた。

### ④ 2018 年第 12 回 IAEG 大会

アメリカの Scott Burns 氏から、2018 年にサンフランシスコで予定している会議を第 12 回 IAEG 大会として開催したいとの提案があった。提案に対し、IAEG 大会は独立会議なので国内会議との共催はどうか、と疑問が呈された。

いずれにせよ、2014 年のトリノでの総会で決定することになり、他候補地があれば投票になる。

### ⑤ 2016 年総会

Marinos、Oliveira 元会長から IGC 大会での総会の開催を検討すべきという意見が出された。イタリアで開催された第 32 回 IGC 大会までは、IAEG 総会も同時開催されていた。2016 年の IGC 大会は南アフリカのケープタウンでの開催が決まっている。2014 年のトリノの総会で議論することが提案、了承された。

今回の Council meeting には日本から 3 名が参加し、他国に比べて決して少なくはなく、2015 年における京都でのアジアシンポの開催の決定、また、千木良会長のプレゼン等を通じて日本の存在と活動が十分にアピールできたと感じられた。

以上